

---

# 心の暗闇

終

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

心の暗闇

### 【Nコード】

N3013T

### 【作者名】

終

### 【あらすじ】

何の変哲もない毎日を送る私が願うのことはただ1つ。

自由になりたい。

誰もが1度は思ったことがあるだろう。

この何の変哲のない願いが私の人生を変えた。

出会う運命ではなかった人が私の前に現れる。

私はこれからどうなるんだろう？

## はじまり

窓越しに見える空は青く澄んでいた。

一羽の鳥が空に羽ばたく。

鳥は自由に空を舞い、そして飛び去って行った。

「自由になりたい」

教室には先生と生徒の笑い声が響いている。

うるさいほどの笑い声に私の呟きはいとも容易くかき消されてしま  
う。

「じゃあ教科書の24ページ開いて!!」

黒板の前に立つ社会科の講師、橋本健二は教室をぐるりと見渡した。

「はい、じゃあ…」

先生の気分で指名された生徒が教科書を音読する。

「よし、ありがとう」

教室にはチョークが字を書いていく音しか聞こえなくなった。

自由になりたい、今度は心の中で呟いた。

休み時間になると教室は騒がしくなる。

「ねえ、愁聞いて!!」

私の前にも1人の少女が立っていた。

「どうしたの？」

クラスで一番仲のよい女子、深山凛華<sup>みやまりんか</sup>は笑顔で私を見つめた。

「あたしね、好きな子ができたの！」

「また？」

中学生にでもなれば恋の1つや2つ構わないが、凛華に限っていえば多すぎるだろう。

「またとか言わないでよ。今度は本気」

「それ、毎回言ってるから」

「え！？そうだっけ…？」

首を傾げる凛華に溜息をついた。

「てか、愁は好きな人できないの？」

「うーん…できないね」

「もったいないなあ。愁、可愛いのに!!」

凛華がいうには私はカッコよく綺麗なんだそう。  
私には理解できないけど。

「で、その好きな子がどうかした？」

「え？そうだ!!その子愁と同じ中学出身んだけど知ってる？名前は…」

名前を言おうとした凜華の言葉を遮り、誰かが凜華を苗字で呼んだ。  
「あー！ちょっと行ってくるね！」

頬を赤らめているところを見ると今名前を呼んだ人が凜華の好きな人だろう。

凜華が駆け寄った先にいたのは…

## はじまり（後書き）

今回この作品を読んでいただきありがとうございます。

この作品を書いているのは本物の中学3年生です。

そのため更新も遅くなってしまっていますが、精一杯書いていこうと思っているので今後もよろしくお願いします。

## 部活

そこにいたのは葉山<sup>はやまよう</sup>要。

私の小学校の頃の同級生。

仲はそこそこよかっただろう。

だが、6年のときに喋った記憶はない。

「アイツね……」

あまり目立つ人ではなかったが結構モテていた気がする。

葉山は私には気づいていないようで楽しそうに凜華と話している。

「今度久々に話そうかな……」

キンコーン

予鈴が鳴って、生徒が席に着く。

いつの間にか窓は開けられていて、風が頬を撫でた。

「恋なんてしたことないな……」

凜華の幸せそうな笑顔を思い出す。

\*\*\*\*\*

今日の最後の授業とHRが終わり、私は部活着に着替える。

「愁!!行こう」

廊下から同じ部活の友人が手を振っていた。



「今行く!!」

「了解」

彼女の名前は橘美咲。たちはなみさき

私と同じ陸上部に所属している。

「今日は何する?」

「え? 美咲決めてなかったの?」

そして美咲は部長だ。ちなみに私は副部長。

「忘れてた…」

「じゃあ長距離走ろうよ!」

「あ、いいねえ」

私の学校は陸上の強豪校。

そのため陸上専用のグラウンドがある。

そこには男女50を超える部員が集まっていた。

「はい、じゃあよろしく願います!!」

「」「よろしく願います!!」「」「」

それぞれに準備体操やストレッチをする。

「まずは30分間走をします。先頭を愁が走るからそれについていてね。」

「じゃあ、本気でいきます」

顎のラインで揃えられた髪の毛を1つに結わき走り出す。  
結びきれなかった前髪が風に流され後ろにいく。

最初はみんな余裕で後ろからは楽しそうな話声が聞こえていたが20分も経ってしまうと苦しそうな息遣いしか聞こえなくなる。

後ろを向いてみると結構距離があった。

「やっぱり厳しかったかな…？」

今だ軽快に走っている私と正反対のみんな。

「まあ…いつか」

30分経って集合するとみんなへとへとになっていた。

「はい、お疲れ～水分補給してね！」

「愁…なんでそんな元気なの…」

今にも死んでしまいそうな美咲。

「長距離ランナーだから？」

私のあいまいな返答に、部員からはブーイングが来てしまった。

その後各々に軽い練習を済ませる。

「時間だね」

「うん。はい、じゃあ今日はお疲れ様！！ありがとうございます」  
「「「ありがとうございます！！」」」

あんなに青かった空は真っ赤に染まっている。

「明日も頑張ろう」

1人呟き、教室に戻るのだった。

## 出会い

教室の窓はまだ開かれたままで真っ白なカーテンが揺れる。

「窓、開いてる…」

窓を閉めようと手を伸ばすと目の前を鳥が通り過ぎていった。

「…鳥は自由だね。」

楽しげに空を舞う鳥を見つめる。

「帰ろう。」

伸ばしていた手を引き寄せバックを掴む。

窓はまだ開いたままだった。

何かを待っているかのように大きく口を広げて

「ただいま…」

家の中は暗く、返事はない。

カチャとカギを閉めてリビングに入る。

「また誰もいないんだ…」

テーブルの上には1000円札とメモが残されていた。

<今日は帰れない。夕飯代>

たったコレだけにメモ。

きつと、父親が書いた物だろう。

仕事しかない父と呼んでいいのかも分からないあの男が。

お金を制服のポケットに突っ込み、少し暗くなってしまった細い道を歩きコンビニに向かった。

いつものようにお弁当と飲み物を買いちよつとした気まぐれでいつも通らない道を歩いてみる。

「明日の夜ご飯どうしようかな…。ん？」

少し先に見える影。

「なんだろう？」

影に近付く。

「っ！…ひ、人…？」

それは壁に寄りかかり、ピクリとも動かない。

「だ、大丈夫ですか??」

肩に触れた瞬間生ぬるい液体が手の平を濡らした。

「ひつつ血？」

雲に隠れていた月が顔を出し、光が差し込む。肩からはドクドクと血が流れていた。

「嘘…し、死んでるの？」  
慌てて携帯を取り出す。

「110で、いいんだよね？」

震える手で数字を打つとガシッとその動きを止められる。

「必…要…ない…」

「え？だ、大丈夫ですか？？ひ、必要ないって…」

「大丈夫、夫だ…」

私の腕を掴んでいた手はするりとはずれ、地面に落ちる。

「あの…！返事してください！大丈夫ですか?!?!？」

（放っておいたら、死んじゃう…）

「それは、ダメ…」

## 出会い（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

できればアドバイスや感想をいただければと思っています…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3013t/>

---

心の暗闇

2011年10月9日02時45分発行